

第21回 記者懇談会実施概要

13.3.13

- 1 日時 平成13年3月13日(火) 15時～
- 2 場所 100周年記念会館 第2会議室
- 3 内容
 - (1) 研究発表(15:00～15:40)
 - ・林 宏昭 経済学部教授
発表テーマ「分権社会に相応しい地方財政制度の確立を
―国と地方の財政再建―」[資料1](#)
 - ・倉田 純一 工学部助教授
発表テーマ「知覚色情報の計測・制御分野への応用」[資料2](#)
 - (2) 質疑応答(15:40～16:00)
 - (3) 学内状況説明・情報交換(16:00～16:30)
 - ア 2001年度入学試験の結果について [資料3](#)
 - イ 大学執行部の組織改革について [資料4](#)
 - ウ 「法科大学院(仮称)」大綱について
 - エ 大学院外国語教育学研究科博士課程の設置について
 - オ 大学院長期在学制度の導入について
 - カ 大阪版TLOの設立について
 - キ 「児島惟謙館」の竣工について
 - ク 卒業式・入学式の挙行について
- 4 大学側出席者
永田眞三郎学長、大和正史教学部長代理、林 宏昭経済学部教授、倉田純一工学部助教授、
中尾正司企画室次長、藤本清高広報課長
- 5 参考資料
 - (1) 石川 啓著『-21世紀の大学-啓く 拓く 開く』(関西大学出版部発行)
 - (2) 『関西大学人権問題研究室紀要 第42号』(関西大学人権問題研究室発行)

以上

分権社会に相応しい地方財政制度を

林 宏昭

バブル崩壊以降、様々な場面で自己責任が求められるようになった。高齢社会を支える地域福祉は非常に高度な互助の世界である。その地域福祉の担い手である地方団体に自立が求められるという皮肉な事態になっているのが現状である。

地方分権には地域にとってのメリットばかりではなく厳しさも求められる。むしろそれだからこそ、過去幾度となく地方分権論がかわされたにもかかわらず進展しなかったとも言える。それでも経済の拡大はさまざまなかたちでの国への依存を可能にしてきた。しかし、高齢社会の到来とともに予想される地域福祉への需要の高まりと現下の財政状況を考えれば、その厳しさを避けて通ることはできない。地域で実施すべき行財政の運営について地域住民に適切な負担を求めることができる地方税制を確立するとともに、地方交付税制度をはじめとする国から地方への資金移転のシステムも見直す必要がある。

報告では、地方税改革の具体的な方向性と国から地方への資金移転のあり方について検討する。



はやし ひろあき
林 宏昭

教授

兵庫県出身。1981年関西学院大学経済学部を卒業。その後同大学院経済学研究科において故橋本徹教授のもとで財政学を研究。88年から92年まで四日市大学経済学部、93年から97年まで帝塚山大学経済学部を経て、98年4月に本学に着任。この間、経済企画庁客員研究員、自治体各種審議会委員等を歴任。94年には関西学院大学より博士（経済学）の学位を授与された。学位論文に基づく『租税政策の計量分析』（日本評論社）では、日税研究賞特別賞（1996年）を受賞。

研究テーマは主として租税についての実証分析であるが、最近は地方分権に関する研究のウエイトも高くなっている。学生たちには、「よく遊び、よく学ぶ」こと、そして「自分で考える」ことを意識しつつ接していきたいと考えておられるとのことである。

知覚色情報の計測・制御分野への応用

関西大学工学部

倉田 純一

概 要

CCDカメラは、ホームビデオはもとよりパソコンや携帯電話などに組み込まれ、画像記録だけでなく高品質なカラー画像を手軽に得ることのできる情報入力の一手段として使用されている。形状ばかりでなく色も重要な情報源であることは日常生活で感じられることであり、温度によって色が変わる液晶温度計や健康診断に用いる尿試験紙など、色情報を用いた計測・検査が実用化されている。これらの計測・検査は見本となる色調表と目視により比較することによって、段階的な結果を得ており、これをカラー画像処理により色測定を基にした定量的計測・検査にすることができれば、在宅ケアなどの分野に応用可能であると考えられる。

そこで、煩雑で処理時間が長いRGB画像を基にした画像処理に替え、知覚色情報である「色相・彩度・明度」の3情報を用いた処理を提案した。特に、色合いを表す「色相」情報は、人間による目視検査の主情報であり色測定を可能とする。知覚色情報を用いた尿検査試験紙自動読取装置や色認識ロボットへの応用事例について説明する。

以 上



くらた じゅんいち
倉田 純一

助教授

1983年10月関大大学院工学研究科・博士課程後期課程を中退。制御工学研究室助手。光学式変位・速度計測センサの高機能化に関する研究を行い工博の学位を取得。93年4月に専任講師、99年4月に助教授。現在は移動ロボット系の視覚情報処理と走行制御について研究中である。古きを尊び新しきに挑む温厚な人柄、学生からはよき兄貴として慕われているが、研究指導は厳しい。研究室の伝統的精神である廃品器材の有効利用を後輩に伝承すべく、日々ゴミの山を横目でニラミながら、創造活動の世界に没頭。学生時代には、自転車にテントを積み込み、琵琶湖畔や淡路島を走り回ったとのことであるが、最近では、その健脚をもっぱら家族との「買物サイクリング」に活用。熱烈結婚の奥様へのサービスは、ドライブと買物同伴（荷物持ち）の由。